

戦後における永井庄蔵の学級文集実践と生活綴方（二）

—水沢・福原分校二年『はたらく子ども21う』から—

* 土屋 直 人

（二〇一三年二月三日受付、二〇二四年一月一八日受理）

はじめに

本稿は、前稿⁽¹⁾に引き続き、岩手の小学校教師・永井庄蔵（ナガイ・ショージ、一九二一年～一九九八年）⁽²⁾が、水沢町（現・奥州市）の水沢小学校福原分校において、一九五二（昭和二七）年度、二年生の学級担任をしていた時に発行していた、一学期の学級文集『はたらく子ども』2号の記述の一部を検討することを通して、戦後における永井の学級文集実践、生活綴方教育実践の特質・意義の一端を探ろうとする、一連の論考の一部である。

本稿では、前稿での作業と同じく、永井と交流のあった、水沢の小学校教師・平塚行蔵（一九二五年～二〇一〇年）⁽³⁾が書き残した、「胆江地区民教連」機関誌『つながり』への一連の連載論考「生活綴方・ある学級文集」（一九九三年）⁽⁴⁾における平塚の永井学級文集の引用や、平塚の考察を祖述し、その指摘を受けながら、永井の学級文集の中の子どもの作品と、永井の記述内容の一部をあらためて追い、その教室実践の実像と特質を具体的に確かめ

てゆくこととしたい。（以下、敬称略。）

一、学級文集『はたらく子ども』について

福原分校の一九五二年度第二学年の学級文集『はたらく子ども』の発行数と各号の内容等について、平塚は、その論考の中で、「二号までは指導初期の段階のもの。三、七号が版画、五号が詩の特集。六、八号が散文中心の総合的な文集となっている。」⁽⁵⁾と記している。この平塚の指摘からすると、『はたらく子ども』の七号及び八号が発行された（実在した）こと、そして『はたらく子ども』が八号まで発行されたことが推察される。

こうした先行研究での指摘を含めて、筆者が確認・把握している限りにおいて、学級文集『はたらく子ども』各号の発行状況、実在の概要については、以下の通りまとめられると考えられる。なお、ここに記した発行年月日は各文集の奥付の記載による。

『はたらく子ども』第1号（*現下未見・未確認）？
 『はたらく子ども2ごう』一九五二年七月二九日発行
 『はたらく子ども3はなが』一九五二年二月一五日発行
 『はたらく子ども4ごう』一九五三年一月二六日発行
 『はたらく子ども5』（詩特集）一九五三年三月一四日発行
 『はたらく子ども6』一九五三年発行（奥付等に発行月日の記載なし）
 『はたらく子ども』第7号（版画集？）（*現下未見・未確認）？
 『はたらく子ども』第8号（*現下未見・未確認）？

すなわち、『はたらく子ども』一号から八号までの存在が指摘されているとともに、一号、七号、八号が未確認、未見の状況である。

これらのうち、『はたらく子ども』第三号、第六号については、山形県国民教育研究所（山形県教職員組合立山形県教育文化資料館）に、その現物が所蔵されている。これらは、山形の生活綴方教師・土田茂範⁽⁶⁾との「文集交換」のなかで、永井から土田に送（贈）られたものと推察される。

また、秋田大学附属図書館内に置かれている「北方教育資料室」には、『はたらく子ども』第三号、第六号の現物が所蔵されている。これは、同室の資料「目録」によれば、戦後初期の一九五〇年前後、青森で生活綴方実践をしていた、鈴木喜代春からの寄贈によるものである。⁽⁷⁾

本稿にて検討の対象とするのは、これらのうちの、学年の初期の時期の発行にあたる、『はたらく子ども2ごう』である。本稿では、山形県国民教育研究所（山形県教育文化資料館）に所蔵の資料を参照・引用する。

以後、第一号、第七号、第八号及びその他の永井の学級文集

の探索・発掘の進展を期しつつ、本稿では『はたらく子ども』の第二号を検討の対象とし、次稿以降にて継続して、『はたらく子ども』第三号、第六号を検討の対象とする予定としたい。

（以下、引用箇所における注記やルビ、傍線や括弧等は、特に注記のない限り、すべて原文のママ。）（なお、本稿の中で、以後に記述している、児童の名前については、すべて仮名（別名）に改変を施している。）

二、福原分校・二年目の永井庄蔵

福原（ふくわら）地域は、旧水沢町（旧水沢市）の市街地から西方面にある田園地帯で、福原分校は、「福原小路」の西方突き当たりの近辺にあったと思われる、当時分校であったと思われる校舎跡の隣には、後藤寿庵（廟堂）⁽⁸⁾がある。

永井庄蔵は、一九五一（昭和二六）年四月から、水沢小学校福原分校に勤めていた。前稿で確かめた通り、同校での初年度は三年学級を担任し、『きかんしゃ』という名の学級文集をつくっていた。

永井は、一九五二年三月、静岡県熱海で開催された全国教科研大会に参加している（教育科学研究会再建第一回大会）。そして、同年の夏には、東北地区教科研（教育科学研究会東北大会）、のちの東北民教研）が、仙台市蓮坊小路小学校で開催され、永井はこれにも参加している。⁽⁹⁾

更に、同年八月には、永井は岐阜県恵那市で開催された、第一回作文教育全国協議会（のちの日本作文の会の全国大会・中津川集会）にも参加しており、「ナガイ・ショウゾウ」の筆名で、同集会への参加報告も記している。⁽¹⁰⁾

2	がまん したことの 詩。	31~36
3	そのほかの 詩。	37~39

このように、『はたらく子ども 2 ごと』の全体は、二部構成になっており、全体のうち、おおよそ、前半部の第一部には散文の内容、後半の第二部には、詩が載せられている。なお、そこには、いわゆる「まえがき（はしがき）」のようなものは書かれていない。

四、散文とその指導

(一)「かきたいことお、どんだん かく」―三つの散文から―

学級文集『はたらく子ども 2 ごと』の、第一部の冒頭には、散文指導に関して、こう見出しの文章が書き始められている。

べんきょう(一)

どんなことが かきたいか。

かきたいことお、どんだん かくのです。

つぎの つづりかた(文)お よんで、どんなことお かきたくて かいたか、考えてみましょう。

その人が何を、どんなことを書きたくて、それを書いたかを、級友の作品を読むことを通して考え、綴ることの「べんきょう」をしようと、学習の方向を示そうとしている。永井のこのコメントのなかに、その散文指導の意図が表れているといえる。

① まるとび

まず一つ目に示されている作品は、次のものである。

まるとび

石川和美

わたくしわ みよこさんと まるとびおして いたら みよこさんが、あ かずみちゃんが「だめなあった」と いいました。また ちえこちゃんが「おらにも まぜらい。」って ゆった。わたくしわ まぜました。

(↑ここまで まるとびのこと。)

まるとび おわたたとき、つぎ まさこさんのうちに、いたら、まさこさんのおばさんが「まさこ いらないよ。」と ゆいしました。かんこけとばしていたら、よしおが「ほら あおりんご やつから。」「せんせいに、あおりんご たべるな」って いいました。

(↑ここまで かんこけとばし していたときのこと。)

ばんに、よしお うちの ふろさはいました。ふろはいっていたら かずみ、ほら あがれって ゆわれしました。わたくしわ ふろから、あがつてから、うちに、いつて ねました。

(↑ここまで ふろにはいったこと。)

そして あさになって「らじおたいそうしてごさい。」と おかあさんに いわれました。

(↑ここまで ラジオたいそうのこと。)

…(後略)…

永井は、この作品「まるとび」の和美さんの書きぶりに即しながら、「書きたいことを書く」という点に言い及ぶ、次のような指導言を記している。

へんきょう

よんでみて、どうでした。どんなことが 和美さんが、かきたかったのか、わかりましたか。（1）まるとびのこと、（2）かんこけとばし。（3）ふろにはいったこと。（4）ラジオたいそうのこと。（5）おかしと、わたくしとよしみのこと。（6）けいばに、いつてみたこと。

この一つの一つりかたのなかに、六つのが すこしずつかいてあります。こんなに、あれも これも と、よくばつたように かくと、よくかけませんね。

まるとびのことか。かんこけとばしか。おかしのことか。いつてみたけいばのこと、どれか、一つ、かきたいことお、どうしたったか。そのとき、どうなったか。どういったか。なにかくふうしたか。なにか、かんがえたか。おもしろかったところ、かつこう など よく おもいだしてかくと、ほんとうに、かきたいところが、じぶんの おもったとおり したとおり、かけて ゆかいです。

づりかたの

はじめのところに、かきたかったことお ちゃんと、かいておくといと思います。

つぎの文（ブン）わ、ちゃんと、かきたいことわ なんだか かいてあります。

こうして、永井は、「どれか 一つ、かきたいこと」を定めて、「よく おもいだしてかくと、ほんとうに、かきたいところが、じぶんの おもったとおり したとおり、かけて ゆかい」なのだと、二年生の学級の子どもたちに向けて、語りかけていた。

平塚行蔵は、胆江地区民教連機関誌『つながり』の論考「生活綴方・ある学級文集（4）」の中で、永井の学級文集のなかの、この

散文と永井の指導言を引き、次のように記している。

題名は「まるとび」となっているが、そのことはさいしょの部分だけ。そのあとへかんこけとばしへふろにはいったことへ、そしてラジオたいそうへはよくじつのことか。すこしずつ、つぎつぎとかいている。なにをかくのがさだまっていけないのである。このような作文も初期の段階にはよくでてくる。

づりかたをかくときは、かきたいことを、ひとつえらんでかくようにするとよい。

それで、「どんなことが かきたいか」また、「どんなことを かきたくて かいたのだろう」

として、できたづりかたをみんなだみて考えている。

そして、いちばんかきたいとおもったことをひとつとりあげて、それをおもいだしてかくようにする。「づりかたのはじめのところに かきたかったことお ちゃんとかいておくといと思います」ともある。¹¹¹

永井は、散文指導の初期にあつて、このように、「できたづりかたをみんなだみて考え」るやり方を、意識的に行っていたのであつた。

② かやのこと

永井は、続いて二つ目の作品「かやのこと」を示し、続けて、更に丁寧に指導言を添えている。

かやのこと。

石原 さち子。

うちで かやお つつたので おかあさんが、かけおかけて、
おがあさんが あさおきてから わたくしわ おきたとき かやお、
はずして、いました。

(↑ここまで、かやお つつたこと。)

こうこさんが わたくしお よびました。わたくしが ふくお とっ
かいて、こうこさんと、わたくしと いっしょうに、きました。それ
で がっこうで、てつぼうしていた。はなこちゃん が せんせい お
はようございますと いいました。はなこさんも、てつぼうに、きて
たかいほう、しました。

(↑がっこうで てつぼうしたこと。)

〈べんきょう〉

さち子さんわ、かやのこと。かやお、つつたときのことお、かきたかつ
たのでした。

ところが、あまり、かやお つつたときのことか かかれていないよ
うです。どうしたら、もっと かやのことが、かけたでしょう。

かやおどこからだしたか。かやおつるときのこと。かやおつるとき、
どうしていたか。かやおつったら、どうでした。においわ。その中
で ねたときのこと。かやのはなしも だましたか。かなお、つつた
ときのこと。かやのこと、いろいろ おもいだして みると たのし
く もっと かけるのでした。かきたいことが きまったら、ぐんぐ
ん かけるようになります。
それでわ、つぎ 3ばんめのお、よんでみます。

こうして、永井は、かやのことを「いろいろ おもいだして
みると たのしく もっと かける」のだと語りかけ、「かきた
いことが きまったら、ぐんぐん かけるように」なるのだと記

し、一度書いた後、もう一度思い出してみて、詳しく書くこと
を励ましている。

③ きねずみとり

これらに続いて、永井は、次の三つ目の作品を紹介する。

きねずみとり。

お橋啓造

①きねずみのす の ところ え ちがついていった。

きねずみのすは、まるいから ②かたつぼのて で まるつけところ

え てお、べたつとした。

まるこい す の あたりのほうから きねずみに ③にげられた。

きのえだを、はねこんでいった。

そのうちに おらだちが、④いし を なげたら、きねずみは、きい
きいつて ないた。そして、りす(きねずみ)は、めえなくなつた。

ぼくたちは だまっていたら、べつな きねずみが きて すぎのき
のほうに のぼってつた。つぎは、すぎのきのうえのほうから おち
てきたから、⑥すぐ なたねのからお かぶせた。とるべつて、ひつ
かいしてみたら、にげられていた。きに のぼっていたひとなんか、
「とつたか。」といいました。

つぎに べつなひとが きに、のぼつて おらだちは、「そこに えだ
から(いたから) はやくのぼれ。」つて いつてた。⑦で、つかむべつ
て すたれば にげて、べつなきの ふつといきに いた。

みんなは、「どこに いだつてよ。」「あああ。」「そこに。つかんで と
ないほうがいい」といった。

ぼくとたつやさんは、きねずみお たねていた。もうひとりの ちゅう
うがく「ねんせいのひとと いた。」「だまつてろ。」と、ぼくがはいまし

た。だまって いたら、したに ⑧したに （おちて） おちてきたから、いし
なげた。きねずみは きのうえ に ⑨あがつていった。
ぼくは、きねずみが、したに （おちて） おちて、きたとき、かおお みたら、
ねこのかおと、おんなじだ（だった）つけ。すりつぼは、もうもうと、けがはい
ていた。あしは、こっこだから あかいくて はじつこのほうが ね
ずみいろです。

永井は、この作品の引用の下部の欄外に、啓造さんに更に詳しく聞いてみたいことを、各行の内容に則して、次のように示し、学級での学び合いのために、思い出して詳しく書くということについて、書き添えている。

啓造さんから、ききたいこと。

☆

うえに かいて ある つづりかたのよいところ、お もつと、よく
する ために。

☆

- ①どこに あつたのですか。
- ②だれが、どんなふうにして。
- ③にげるときの きねずみお、みましたか。どんなふうだったろう。
- ④どこにいたか みえたのですか。
- ⑤べつな きねずみとゆうのわ、どんなところで わかりました。かつ
こうが ちがつていましたか。
- ⑥ここは、うんと どきどきしそうで、おもしろいところ。だれが
かぶせました。

おりてくるようす。

みんなわ、どうしていました。けいぞうさんわ、どんなにして い

たでしょう。

⑦でつかむべとしたんだ。つかんだら、いくら おもしろいか。い
くら はなれていたか。

きねずみ どうしていたか。

にげられたとき、どうしたか。そのひと。

ぶつとい きに いる きねずみのこと。

⑧おりてくるようす。あがつていくようす。

みんな、ほかのひと、けいぞうくんたち、どうしていたか。

永井は、この作品のよいところに積極的に言い及び、褒め励
ますような、次の指導言を記している。

★べんきよう★

啓造（けいぞう）さんの きねずみとり。なんのことか かきたくて
かいたか、ちゃんと、わかるでしょう。

啓造さんは、きねずみとりのことを、かきたかったから きねずみと
りのことと、はじめに、ちゃんと、きめて、かいておいたのです。

きねずみをとるときのことを、どんなにしたか。きねずみは、どうし
たか。なんといったか。ぐんぐん かいていった。どこを、よんでも

きねずみのこと。きねずみおとるとき どうしたか わかります。

——を、ひいてあるところも いいところですが よんでいると、き
ねずみから、みんなが 目を はなさないでいる。心をなさないで、
いっしょうけんめい なって いることが ぐんぐん わかってくる。
かくときも、きねずみとりのことを、心から、はなさないで いっしょ
うけんめい かいたのでしょう。よいことです。

子どもの書きぶりには、その子の暮らしぶりが表れてくる。

永井は、「よんでいると、きねずみから、みんなが 目をはなさないでいる。心をはなさないで、いっしょうけんめい なっていることが ぐんぐん わかってくる。」と、そのよさを述べ、「かくときも、きねずみとりのことを、心から、はなさないで いっしょうけんめい かいたのでしょうか。よいことです。」と、その書きぶりと暮らしぶりのよさを、学級に語りかけていた。平塚は、この作品「きねずみとり」と永井の散文指導について、こう指摘している。

このつづりかたは、いたらないところもいろいろある。だが、きねずみとりのことをせいっぱいがんばってかいているすがたがうかがえるつづりかたになっている。まずは、かきたいことをひとつきめて、そのことに集中することである。それをこのようなつづりかたで学習しているのである。⁽¹²⁾

子どもたちは、「かきたいことお、どんどん かく」ことを励まされながら、暮らしを詳しく書き綴ることをはじめている。

このように、永井は、二年生の散文指導において、まず「書きたいことを書く」ことの指導を心がけ、学級文集を通して、実践していたのであった。

(二)「一ど、書いてから、よんで おもいだしたことを、書き たしたもの。」——二つの散文から——

続いての箇所では、「べんきょう。(二) 一どかいたあと、よんで おもいだしたことを(ママ)、かきたしたもの。」という大きな文字の表題・見出しを付して、以下のような解説を記して

いる。

べんきょう。(二) 一ど、書いてから、よんで おもいだしたことを、書きたしたもの。

一ど 書いてから、よむと よいこと が あります。
。「」をつけたら、じを なおして よみやすくします。

よんでみると もっと こんなこともあった こんなこともかたつたと、はつきり わかってくるがあります。それを かいて たすと、よくなります。

こうゆうことをしているひとが 二ねんせいにも できました。
みんな、やれるように、なりましょう。

ずがを かいてから、ほんとうのものと、くらべたり、かんがえてかいた、えを みて なおすのと、おなじです。よいことです。

永井は、一度書いたあともう一度読み返し、思い返してみると、はつきりとわかってくることもあり、それを書き足すと更によい文になるのだと記し、思い返して詳しく書くことのよさを、子どもたちに考えさせようとしている。

① いたばちひろい

そしてまず、具体的に、どうすればいいか、それを一緒に考えていく一つの手段として、次の作品「いたばちひろいしてはたらいたこと」を引いている。「いたばち」とは、板の切れ端のことである。

そこでは、「はじめにかいたもの」「きいたこと」「二かいめに おもいだして たして かいたもの」の3つを、上段、中斷、

下段の、三段で挙げ、学びのプロセスを再現（提示）している。
先ず、上段の「はじめにかいたもの」は、こうである。

いたばちひろいして はたらいたこと 山口 光雄

はじめにかいたもの。

★

ぼくわ、きのう やすひこと、いたばちしろいに行った。

おきな き お しろってきた。

こんど やすひこが、たっちゃん むかいに、いくべといった。

ぼくわ、いかないとゆったけ、やすひこが ないた。

ぼくわ、また、いたばち しろいに、いきました。

こんど、おきな、どんころ お しろってきた。

やすひこと ぼくが、どうろに、いって みたら、

たっちゃん が、がつこうから かえって きた。

いっしょに まききりお しました。

次に、中段では「きいたこと」が記されている。上段の「はじめにかいたもの」に対応させて、上段の最初の作品に、学級の皆で質問をして、聞いていったことを、各分節ごとに、記している。これらは、実際に学級の中で、この作品を読みあい考えあったこと、もっと聞きたいこととして、挙げていったものを、永井がまとめたものと考えられる。

きいたこと

★

どこえ ひろいに行ったか。

したくわ、

いたばち、どんなになって あったろう。

ひろうところや、くふうしたこと。

ひろうときの、おもしろかったこと。

もっていくときのこと。

いたばち ひろい やめたのか。

こんどは まえに、いったときと、ちがったのか。

こんど、どう「ゆう」ふうにして、いったろう

どこから、ひろってきたのですか。

よく、おおきな どころ もってきました。

たっちゃん、どこにいたのでした。

まききるところ。

そして、下段においては、光雄さんが、思い出しながらあらためてのちに書いた文を記している。

二かいめに おもいだして たして かいたもの。

★

ぼくわ、きのう やすひこと いたばち（おちじ）しろいに行った。

かあさんに おしえられた山に、いった。

なわお ぐるぐる まるめて やすひこのと いっしょにした。

かたつぼうのて わ ポケットに いれて いっしょにした。

その山に いっしょに、いっしょにいった。

へんな いたばち、しかくな いたばち、きれいな いたばち、よご

れた いたばち、なげさつたり 山もりに、なつて いたりしていた。

やすひこ「あつちのほうに、いたばち かたまつてある。」つてな

わお、もつて はしつていった。

かお すこし きれいな わらいながら はたらいていた おちいさんが、「そこに ある いたばち みんな、とつても、いい。」と いった。 いったい とつた。三十ぼん いじょう とつた。なわで まるく しばつて しょつた。さきに、やすひこに、しよわせて ぼくも しょつた。かたが おもくて いたいの で なわお、かたのはじの ほねの うえに、のせた。いたくなくなった。うちに きて どさんと おろした。

「また、とりに いつてきたら、あめつこ二十えんだい、かつて、やつから とりに おいで。」と 火お たいていた ねえちゃんがいっ

た。 こんど やすひこが たつちゃん むかいにいくべといった。そこで、とちゅうのくさつばらで ころつと たんぼのほうえ、あしお いれて やすみながら、「おら、あと いかない。」と いったら、やすひこが ないた。

だまつてないた。それで、「おら、また いく。」と いった、おかあさんに、おしえられた山に いった。 はしつていった。

さつきと、ちがう よその おちいさんが いて おこつた。

「こら、だれだ。いたばち ひろうやつ だれだ。」と、どなられた。

はお だして ひげなんか うんと おがつていて たつて おらみていた。おつかないから、やすひことこ、はなさないようにして はしつてきた。

たけひとくんのところまで こわいから あるいてきた。

ひろつてきた いたばちなんか きつていた ねえちゃんに、 「こんど やすひこと いったら よその おちさん だまつて たつていて、こら だれだ。いたばち ひろうやつ、だれだ。と おこられたから につて、はしつてきたのだ。」と おしえた。

ねえちゃん わらいながら、おつかながつたべ と、いつてくれた。そして、ねえちゃんは サイフから 二十えんもつてきて キャラメル かつてくれた。

こんど、わらこうばのわら、ぐちゃぐちゃはいつている どぶみtaina ところに、どんころ うんと はいつてゐるのです。ぬれてゐるから ふくが ぬれないように、てにのせて もつてきた。うちのよこのところにおいた。

こんど やすひこが、「たつちゃん むかいに いくべ。」といった。

やすひこと ぼくが どうろに いつてみたら、さかの下のところにかえつてきていた。

たつちゃん はやくこい と ふたりで、さかんだら、たつちゃん はせて(はしつて)きた。そして、 いっしょに まききりした。

ねえちゃんわ、「それ かわかつて、わつて ストープに もやすから。」といった。

こんど かあさん かえつてきて「こんなに、いたばち ひろつていたのかい。めんこい。めんこい。はたらくなあ。」といった。

あめつこ 50えんかつてきて、みんなで(みんなに) わけてくれた。

みんなが おいしがつて かつた。

永井はこの三段の表記のあとに、「くわしくわかつてよい」と、次のように指導言を記している。

★べんきよう★

みつおくんが やすひこさん と、いたばちお ひろつてきたことお かいたのです。

うちで、かいて きたのでした。一かいめに かいたのと、二どめに せんせいと、はなしながら、かきたしたのと、よんで くらべてみ

なさい。

ひろってきたことを、ねえさんも おかあさんも よろこんでいることや、ちいさい やすひこまで いたばちを ひろって みんなではたらいでいたのが わかってくるし、いたばちひろいに いったときの おじさんのことも わすれられないことでした。それが、二どめには、ちゃんと かいてあるし 一かいめのに かかれていません。

二かいめのほうが、みつおくんの いたばちひろいのことが おもしろかったこと、よろこんでいること、いっしょうけんめいしていることも よく おもいながら かかれて、くわしくわかってよい。

永井は、書く前と後を比べさせることによって、思い出しながら詳しく書くことのよさを、語りかけている。こうすることで、姉や母の喜びや、皆で働いていたことがよく「わかってくる」し、「おもしろかったこと、よろこんでいること、いっしょうけんめいしていることも よく おもいながら かかれて、くわしくわかってよい」と、その書きぶりを褒め、励ましている。

平塚は、この作品と、永井の指導について、こう記している。

これは、こどもと教師が対一でべんきょうしたこと（膝下指導）。それを文集にのせてさらにみんなで学習する生きた教材としているものである。

一どかいたら、もういちど読んでみて、なお思いだしたことをかきくわえていくべんきょう。それは、自分の生活をしつかりとみつめていくことになる。そしてそれは、ほかのひと誰にもわかるようになるためのべんきょうになっていく。

いたばちいたきれのこと。板のきれはし。板端。板切。いたっぱ

じともいった。当時（昭和二十年代）は今日のような石油時代ではなかった。だいたいひろいあつめては燃料にしていたのであった。⁽¹³⁾

平塚は、これらの、「一どかいたら、もういちど読んでみて、なお思いだしたことをかきくわえていくべんきょう」は、「自分の生活をしつかりとみつめていくことになる」と指摘していた。こうして、一度書いた文を読み返し思い出しして詳しく書くことを促す永井の生活綴方実践は、「自分の生活をしつかりとみつめていく」眼芽を育てるものであると、その価値を指摘していたのであった。

②「かずおくと わたくし」

続いて、永井は次のような作品も取り上げ、示している。

かずおくと わたくし

石橋 英司

かずおくんが ぼくに どうきように いけば、カバヤ キヤラメル
とりかえるに、みい、カバヤのかみお だして 「このな けか。」
と、はな お くちのところに くつつくような かおして いいま
した。それから、かずおくんが 「か が つくから、かんがえろ。」と
いいました。なんのことだか、わからなかった。

「こんけつだ。」と いって にぎりこぶし お あげて ぼくお はた
きました。

ぼくわ、あかくなつた。

（せんせい） せんせいが ろうかの ぞうきん あらつてるところ、いそいでき
て ごつつ はたかれた。あおいくなつた かずおくん ぼかん
と ただ たつていたの、かずおくん あかくなつた。せんせい な

んだか くだった ようでした。

そして、せんせいに しばらえて、こくばんのそばえ いきました。ほくも、こくばんのそばに、すわっていた。

かずおくんが ないた。

せんせいが なんだか みんなに おはなしお きかして、おしえていました。

おしようさん、こぞっこ、なんだか なんて いってました。ずっと

たつてから あた かずおさんが なかねで こくばんのところえ

しわつて だまつて しずかに、したおみて、せんせいに、なんだ

か おはなしされていました。そして、かずおくん、せんせいが

いつてよいと、いいました。かずおくん、あおくなつて したお む

いて まなこお、あかくして かえつていった。

「あした かならず はだかねつこ。」と みんなに かたつた。

みんなも、「はだかねほ、いい。」と たかく かたつていた。

まだ、ぼくわ、あかくなつていた。ぼくも「はたかねほ、いい。」と

おもつたつた。

かずおくん、悪口を言われ、叩かれたときのこと、かずおくんが先生に叱られ指導され、それを学級で話し合ったときのこと、そして、その折々に思ったことを綴っている。

この作文に対して、永井はこう書き添えている。

★べんきよう★

● ひいてあるところ、あとから おもいだして かきたしたと

ころ。——のついているところを、ぬかして、よんだのと、いれて、

よんだのと、どっちが、よくわかりますか。どんなところも、かけ

ばよいか、きおつけて、よんでください。

● かずおくんと、えいじくん、そうじのしまいごろ けんか みたいになつていたのでした。せんせいも、ほんとうのことが わからないので、かいてもらったのでした。

なんか、よんでみても、せんせいも、かずおくんも、はたくのわ、

よくないようです。ほんとうのことが、このつづりかたのように、

わかつてくると、ますます、はたかなくともよいし、「かがつくから

かんがえろ。」のあと、はたかなくともよい と おもわれます。

このように、ほんとうのことをかくこと、わかることわ、よいこと

です。

ここには、喧嘩や悪口、叩き、叩かれる関係がある。永井は、

自身も「ほんとうのことが わからないので、かいてもらった」

のであった。この綴方のように「ほんとうのこと」が「わかつてく

ると」ますます「はたかなくともよい」ことがわかつてくる。こう

して、「ほんとうのことをかくこと、わかることわ、よいこと」

なのだと、考えさせる手立てをとっている。

詳しく書くと、よくわかつてくる。はたかなくていいことが、

わかつてくる。書くことの指導、生活綴方は、生活指導でもあつ

た。こうして、ここには、生活指導実践の側面が読み取れる。永

井の生活綴方・学級文集を通した教育実践は、言わば、〈書きな

がら「ほんとうのこと」をわかつていく、わかりあつていく〉こと

を求める、生活指導としての実践という側面を持つものでもあつ

たといえよう。⁽¹⁾

(三)「どんなとき いいひとだなあと おもつたか。」——三つの
散文から——

次に、「どんなとき いいひとだなと おもったか。」という大見出しの下に、永井は、このようなリード文を書いている。

どんなとき いいひとだなと おもったか。

わたくしたちは、みんなのためになる いいひとに なるように くらしていきたい。

この、どんな時にいい人だなと思ったのかを書き綴ってゆく仕事は、皆のためになる、いい人になるように、暮らしていくことを、求めようとするものであった。

ここには、都合七つの作品が記載されている。そのうち、五点については永井の指導言、コメントが付されている。

その七つの作品とは、次に取り上げる「いどなおしたときのこと」、「ぎゅうにゅうのこと」、「えいがのとき」のほか、あいこちゃんから鉛筆を借りたことを書いた「あめふり」、はなこちゃんから仲良くやったことを記した「まりつき」、あいこさんのうちに花を貰いに行った時のことを書いた「はな ほしかつたときのこと」の、都合七つの作品である。

以下、そのうちの三つの作品を引きながら、考えてみたい。

①「いど なおしたときのこと」

永井は、まず、井戸を直した時の顛末を書いている、次の作品を挙げている。

（1）いど なおしたときのこと。

いとう おさむ

ポンプの がっちゃん がっちゃんの まるいの こわれた。はじめ いさおくん が しばった。そでお まくって てお いて ぶつ ぶのぶうと まるこいのお しばった。けいぞうくんが うーんといって まるこいのお、しばた。わたくしも、まるこいのに くつついて いるかわ お しばた。

マサミさんが、てお あらいに きました。

けいぞうくんが、あた さって まさひこさん なんぼ しばても わからない。

また、けいぞうくんが 二ほん ゆびで、びつかけて ぶつ ぶのぶうと ひつばった。それでもとれない。水のむかねの ひしゃくのまがつ たとこ ひつかけて わかね わかね と いって ひつばった。

すうつと おとたてて おしまいに、すつぽん と のけた。 と なるのポンプから、みずくんできて あたらしいポンプさ へで くんた。ポンプのみずが にこつて あぶくと いつしよに できて いた。

だんだんきれいになった。

みずが ふえてくるように いさおくんのずぼんが のれた。ひとさ かけべとおもったら おれさもかかって わたくしもずぼんが の

れた。ばち あたつたのだ。

こんど、けいぞうくんが のれた。けいぞ「う」くんが 水をのむとき、 かずおくんが、かけたので かおさかかった。

けいぞうくん、おこるような かおして ごんぎり はいた。かず おくん くやしくて、とうと ないた。

こんどわ、あきおくんが ばか と いった。わたくしが ごろごろつ と あしかけで ころんだ。

かずおさんが わらった。なんぼか おもしろかった。 いどわ、で

きあがった。

この綴方について、平塚は論稿の中でこう解説している。

※ここにてているポンプは、手動式の吸い上げポンプ。

まるこいの―これはピストンのことをさしているのだろうか。

※なかなかリアルなつづり方になっている。だが「どんなときいい人だなあとおもったか」―そこはどれほど意識されていたものか。

ここは、かいたあと、先生との話合いの中で確認がなされている。それは次の指導者のコトバ、②「(2)」の「ともだち、どんなによかったか。だれがなにしたか」にてくる。¹⁸⁾

この後、永井は、「どんなとき、いいひとだなあと おもったか」に迫るため、まず、「おさむさん」が永井に教えてくれたことを書き添え、時々の状況や一人ひとりの行動を、いま一度振り返ることを促しながら、次のような呼びかけを書いている。

★このつづりかた かいたあと、おさむさんが せんせいに おしえたこと。

(1) あきおさん いどのしたの まるけの、くりくりまわして 水の
でるところ とった。そしたら、すうーと くうきが はやくなっ
てあと、しずかになったの、かかなかった。けいぞうくん わらっ
たこと、いどなおすのよかった

(2) ともだち、どんなに よかったか。だれ なにしたか。

いさおくん。 なんぼか こしらえた。

たつやくん。 水もってきた。

まさひこさん。 ねちみつけた。

しげるくん。 ちゃんと、コンクリート きれいにした。
けいぞうくんも よかった。まるけの いっしょうけんめいとつ
た。

おれも まるけの とるべとした。

★いどお、なおそうとおもって みんな、がんばっています。だれが、
どんなふうにしたか、水のでてくるようす、おと、など いどなおし
のときのこと、いきいきと目に見えるようだ。

おしまいのほうで、できあがってから、はたいたりしているのわ、ど
うしてだったろう。みんなで、ムラのミチブシンで うたって いい
のでないか。

はたらく子どもわ、いどなおした子どもたち、おしまい、ばかなど
でない はたかたたりしないで いくくふう、みんなが ゆかいにな
るようにしたら よさそうです。

永井は、この綴方から、皆が頑張って井戸を直している時の
様子が「いきいきと目に見えるようだ」と評している。他方、永
井は、「おしまいのほうで、できあがってから、はたいたりして
いるのわ、どうしてだったろう」と問う。「はたらく子どもわ、
いどなおした子どもたち」だ。「おしまい」のところは「ばかな
どでない」。「はたかたたりしないで いくくふう、みんなが
ゆかいになるようにしたら よさそうです」と記し、人をばかに
したり、叩きあたりなどしない工夫をして、皆が愉快になる
ようにしたらよいと、付言している。

平塚は、この永井の働きかけについて、こう指摘している。

このつづりかたのおしまいのほう―ちよつとわるふざけになったも
のようである。しかしこれもみのがすことはしない。せつかくしこ

とおわったあとで、水かけになったりひとをこんがりたたいたり…。これもこども（人間）の現実の世界。こども教育の大事な対象。

「ムラのミチブシン」というのは最近ならいはじめた歌なのだろうか。なにかしごとのもとにはみんなであたりたりしていたものか。いどなおしに成功したのであるから、そんなとき、こんな歌がでてくるよう期待をかけている。⁽¹⁶⁾

こうして平塚は、「わるふざけ」という、子ども世界の現実を見逃し見過ごすことをせず、大切な教育の対象と捉える、永井の指導言のなかの視点に、共感を示している。この平塚の指摘を敷衍して言うならば、永井は、悪ふざけや嫌がることをし、叩きあう関係など、子どもが綴った生活のなかの事実、「こども（人間）の現実の世界」を、生活指導の重要な契機、「教育の大事な対象」として、見逃さず捉え、語りかけていたのだといえる。その意味で、この部分にも永井の、生活綴方を通した生活指導の実践を、見ることができる。

② 「ぎゅうにゅうのじ」

次に、先に「いたばち」を綴った「みつおくん」が、「ぎねずみとり」を綴った「けいぞうさん」の家から、牛乳をもらおうとした経緯、やりとりを記している、次の作品を置いている。

ぎゅうにゅうのこと。 けいぞうさん と わたくし。

山口 光雄。

かあさんが、「うちのとうさん、きょうから なんにも くわないから かわいそうだな。」と みんなにいった。「うんだな。」と ぼくが

いった。

ぼくわ、「とうさん いまごろ うなっているんでないか。」とうさん かわいそうだな。」と やすひこわ、くちのほう あおくして めお よこに まげたようにして いった。

かあさんが 「ふくわらで どっか ギゅうにゅう うるところ ない べか。」「かつちゃん どっか、あるところ ないべか。」

「そんで、けいぞうくんのうちに、あるべ。」「うし いるから。」 かあさん くちのところ あけて よろこんだようにした。

「けいぞうくんって どこや。」

「おおはしの つぎのところに、⁽¹⁷⁾こうばの うしろのきのある ところ だよ。三げんめ うちのところだよ。」

「うんで、あした いって きいで ちょうだい。」と、かあさんが いった。

ぼくに ねっちゃんか「ライスカレー にてくれ。」と いった。ぼくわ

うんといってたいた。きょうのあさ おべんとう おかず ライス カレーと、いものおかずだった。

けさ きてみると、けいぞうくんが すなばで あそんでいた。

「けいぞうくん ギゅうにゅう うるが。」

「うちのひとに きいてみる。」と わらって、けいぞうくんが いった。

「うんで うちのひとさ いって みるか。たぶん うらなべ。」

「そんで きいてみるや。」

「うん。」と けいぞうくんが いった。

「まちの ギゅうにゅう うすくて、なお、やせつから だめだなあ」「そうだがなあ。うらなつたから、だめだなあ」と おもいました。

けいぞうくんわ、かさお かぶって、あめのみず ぐちゃぐちゃと なっているところで、かさお かぶって、だまってみていた。けいぞうさんわ めお ひっこめて、くちのところ ふくらんだところお

だして なんだか びょうきに なっていったんだか しれない。さつきぎゅうにゅう お きくととき、わらって いたのに、こんどきげんこ わるくなったようだ。

ぼくわ けいぞうくんが すこし かわいそうに なってきた。

ぼくわ きたない足だから、あらって はいっていった。

ぼくわ はやく あしたに なれば いいなと ちいさい こえでいった。

「あしたに なれば はやく とうさんのところに ぎゅうにゅう おもって いけるだ。いいな。」はやく あした なれば いいなあと ちいさいこえで いった。

かあさんも、はやく ぎゅうにゅうお、かって とうさんのところにもっていつて のませたいなあと おもっているだろう。とうさんでも、やせて どうなっているだろうなあ。しんばいだなあ。

たつちゃんわ、きょう ライスカレーお もっていつたから、すこしとうさんも よろこぶべなあ とうさんも うなんなくなつてねつがさがれば いいなあ。したら、とうさんも よくなるさなあ。とぼくが しずかな こえで、ひといいなところで ひとりごと いった。

きょう きて、こくばんに くるま お かにいていたら、けいぞうさんが よつてきて、

「ぎゅうにゅう いいじよう。」と ぼくに いった。ぼくわ、「えがったな」と かたつた。

かあさん よろこぶべなあ おもつた。ぼくわ「なんぼで うる。」と いったら けいぞうさんが、かおお かくして「なんぼで うるか わかんない。」といった。

みつおくんは、病気で入院している父親のために、けいぞう

さんに、牛乳を貰えるかを確かめ、お願いをすると、けいぞうさんは家の人に聞いてくれて、貰えることになった。みつおくと家族の、父親を思う気持ちが伝わる作品であり、「どんなとき、いいひとだなあと おもつたか」が、よくわかる作品である。永井は、こう書き添えている。

★みつおくんわ、このつづりかたお かいだ、あとで、けいぞうくんに、

ぎゅうにゅうのこと きいてくれたこと、それから、ぎゅうにゅう あると いわれた とき よかつた と いった。けいぞうくんのしんせつが うれしいし、ぎゅうにゅう こいのお おとうさんにやれるのお おもうと、よけいに おもしろいのだと思う。

ぐあいわるい おとうさんのことお みつおくんも、おかあさんも、みんなが思おもっていることが よくわかつてきます。

けいぞうさんが、みつおくんに しんせつに して やつたことが、また、みつおくんやうちのひとにも、よろこばれたのではないかと おもわれます。

永井は、みつおくんは後で「よかつた」と言っていたことを言い添え、けいぞうくんの親切、みつおくんとの家族を思う気持ちがよくわかと、あらためて記している⁽¹⁷⁾。

③ えいがのとき・しげるくんのこと

一方、このような作品も、挙げられている。

えいがの とき しげるくんのこと。

こはた あきお。

しげるくんが、えいが はじまったぞう と、ごぎに、すわって よんだ。

ぼくわ、すもうとつてた。はじまったから、いった。

一ねんの まさこちゃんと、みつとしさんが ころばしたりなんかして けんかしていた。

しげるくん すわってて、けんか ごぶごぶ はっすんごぶ といつて ふたりのあいだに、てお いった。きるように、ぼんとした。てお はなした。しげるちゃんのが いたに ぶつかつた。ぎつたん

ばっこみたいに ぶつかつた。まさこちゃん すぐ やめた。みつとしさん わらって すわつた。しげるくん けんか やめかしたの えかつたなと おもつた。

分校での映画の上映が始まったときのこと、一年生が転ばしあつてけんかをしているところに、しげるくんが「はっすんごぶ」と分け入って、けんかをすぐにやめさせた。あきおくんは、それを見て「えかつたな」と、その思ったことを綴っている。この文に、永井はこう書き添えている。

★これわ、あきおくんが せんせいにかたつて、せんせいが かいたのです。

とても、いいところが あります。しげるくんが やめかすところなど、なかなかおもしろくて、みつとしくんも、けんかやめたあと わらっていたりします。

しげるくんのやめかしかたも おもしろいし、あきおくんが そのとおりかたつたのも、おもしろく よいと おもつた。きいていたせんせいも わらいました。

かたるように、かけば あきおさんのはなしのように おもしろい

のです。

かたるように かく。心（こころ）のなかで かたるようにかく。

永井は、「あきおくん」が語ってくれたことを、こうして文字にして書いて示した。これも先ほどの「膝下指導」（二対一の指導）であろう。こうして「かたるように かく」とよい。「心のなかで かたるようにかく」のだ。

このように、永井は、〈心の中で、語るように書く〉ことを励まし、そのよさを、作品を通して学級に語りかけていたのであつた。

平塚は、これらの作品と、永井の指導のなかにあるものを、こう記している。

文字はまだおぼえてなくても子どもは生活をしている。生活のみつめている。コトバをもっているからしゃべることができる。生活をコトバでとらえる（表現「する」）ことができる。けんかをとめたしげるくんのこと―それは「どんなとき いい人だなと おもつたか」のひとつをとらえている。心をはたらかせてかたっている。

つづりかたは文字をつかつて自分でかけるようになるというのが、そこまでのいくのに少し時間のかかる子もいる。そのときは教師が文字化してやれば、その子の生活はつづりかたになる。子どもはそれをみたとき、はやくひとりでかけるようになりたいと意欲「を」もやす。（：略…）⁽¹⁸⁾

「子どもは生活をしている。生活を見つめている」のだ。子どもは生活を「コトバ」でとらえることができる。だから、こうして、たとえ文字を書けなくとも、ことばを持ち「心をはたらかせ

てかたっている」子どもの声を、教師が文字にすることで、「その子の生活はつづりかたになる」のだ。そしてそれはその子の暮らしを綴る意欲を励ますものとなる。これは、永井にとって、小学校低学年における生活綴方指導の一つの要諦として、自覚的に押さえられ実践されていたことであつたろう。そして平塚も、その要諦をよくわかつており、自らも実践していたのであつたろう。

そして、平塚は次のように、『はたらく子ども 2 歳』の同章の散文指導の全体をとらえていたのであつた。

『どんなとき いいひとだと おもったか』——このタイトルは、なかなかいい。これは生活綴り方の大事な指導題目。

ここには、二つのつづり方しかあげなかったが、ほかに次のようなつづり方がでている。

あめふり(遠藤光子)——あいこちゃんのかさにいれてもらったこと。

えんびつ(安藤達也)——はなこちゃんからえんびつをかりたこと。

ぎゅうにゅうのこと(山口光雄)——おとうさんが病気のとき、けい

ぞくんのうちからぎゅうにゅうをかうことが

できたこと。

まりつき(山地マサミ)——まりつきをみんなでなくよくやったこと。

はな ほしかつたときのこと(石田明子)——あいこさんのうちに花

をもらいにいったときのこと。

そんなときのこと——そこにてくる人たちがいいひとだなあと思つたことを具体的にとらえている。文のかき方にはまだなれていないところがあるが、そこには当時のなまの姿がでている。

こうして、福原分校の小学二年生「はたらく子ども」たちは、「だれにもよくわかるようにする研究」の勉強をすすめていたのである。¹⁰⁴

このように、平塚は、永井の生活綴方実践のなかに、「生活をしている」子ども、「生活をみつめている」子どもの姿を見ていた。そして、永井の「だれにもよくわかるようにする」ことを意図した散文指導、生活綴方実践のなかに、心を働かせている子どもたちの生活と、その生活をいつそう励まそうとしていた、永井の学級文集実践の意義を見ているのであつた。

五、子どもたちの詩、詩の指導

(二)「わたくしは、いやだ。」

次に、学級文集『はたらく子ども 2 歳』の後半部を追ってきたい。その全四〇頁のうち、二九頁以降は詩の内容となっており、永井はそこに三つの章を置いている。その最初の章の冒頭にはこう記されている。

わたくしは、いやだ。

どんなことが いやだか、わかる。

いやなことお、ならべているのです。

いやだなあと 思ったときのことお、いつか、よくかいてみよう。

永井は、これに続けて、「いやなこと」「いやだなあと 思ったときのこと」を綴った、「どんなことが いやだか、わかる」次の七人の詩を取り上げている。この七人のように皆も「いつか、よくかいてみよう」と、永井は学級に呼びかけていたのだった。

① おおはし けいぞう。
かじわ いやだ。

どろぼう いやだ。

きしゃ に、ひかれる。

けんかお する。

ころばすのは いや。

一ねんせい のとき、

みつおさんに ビンボンおけろ

と いわれたのも いやだった。

② おおき しげる。

かじなつたほうが げない。

びょうきも げない。

てお やけどしたのもげない。

やねから おつたのもげない。

けがしたのも げない。

はたかれたのも、げない。

③ やまぐち みつお。

あしに くぎさしたの いやだ。

てお きつたの いやだ。

だら かけらいたのいやだ。

ころんで いしに ぶつかったの いやだ。

どろぼうに、もの もって いかれたら、いやだ。

じどうしゃに、しかれたの いやだ。

ころばされたの いやだ。

しぬのも、いやだ。

④ いしかわ みさこ。

はらお^あ いたいて こまった。

あたま いたいて こまった。

うんと せん ひやくにちせきで こまった。

三ねんせの あきちゃんに

ころばされて やだかった。

⑤

わたくしわ かじも、じしんも いやです。

かみなりも いやです。

はたかれるのも、いやです。

ねじられるのも いやです。

⑥ 石田 明子。

でが ぐにやつと まがった。

はらが いたくなったり

あたまが いたくなったりしたの いや。

おおき、しげるさんが、

おおの かつおさんに ころばされて

しげるさんが あしがいたいとないている。

⑦

ぼくが、あし(が)わるくなつたのお、きくと

へんになりました。

ぼくみたとき、

せんそうで、あしが いたくしたひと

土 屋 直 人

おかねお もらっていました。
しげるさんが

おおのかつおさんに、おされて
いたいと いていた。

そのとき また、けんかおして
あしお、いたくしていた。

あしお、けがしたのも いや
けんかおして あしお いためたのも いや
はたかれて

あるかなくなるのも いや。

二年生の子どもたちは、このように「わたくしは、いやだ」を詩にしていた。各々が、具体的な状況の中で、嫌な思いをしていること、恐れや苦悶や困惑を、ことばにしている。その中には仲間の暴力・暴言、仲間の心身の苦痛や辛さ、地震・火事や病気・怪我、盗難への嫌悪もある。

子どもたちの詩には、人間としての普遍的な願い、あるいは生活者としてのへよりよい暮らしへの要求が表現されており、その表現を保障し促す働きかけが、永井の生活綴方実践のなかにはあったといえる。なお、⑤と⑦の二つの詩には、作者名の記載はない。

永井は、これに続いて、「いやなこと」を詩に綴りながら、考えていく意味を、こう書き添えている、

★みんなのために ならないことお、まっすぐ いやだ といえて、
だれもしないように、がんばって ゆくと、だれも かれも、みんな、
よくなります。

わるいことお、いやだと いえるひとに なりましょう。どんなことも。

みんなのためにも なることお すきになるように。 かんがえて やって ゆくのです。

1から7まで、いやなこと、こまることばかりです。

こうして、永井は先ず、嫌なこと、嫌だったときのことを詩に表現することを促していた。皆のためにならないことを真っ直ぐ「嫌だ」と言えて、誰もそれをしないように頑張つてゆくと、誰も彼も皆「よくな」るのだ。だから、どんなことでも、悪いことを嫌だと言える人になろう。皆のためにもなることを好きになるように、考えてやっていくのだ。永井は学級文集で子どもたちにそう呼びかけていた。ここにもまた、生活指導を意図する側面が、明瞭に窺われる。

平塚は、次のようにとらえ、指摘していた。

いやなことのら列からはじまっている。だが指導者は「いやだなあと 思ったときのことお、いつか よく かいてみよう」とよびかけている。いそがないのである。そしてまずは、「いやなことお いやだといえる人になること。わるいことお わるいといえる人になること」をめざしている。くわえて「みんなのためになることお すきになるように。かんがえてやっていくのです」としている。ここに確信をもったつづり方導入初期のすがたをみることができる。⁽⁸⁾

平塚は、永井の「いそがない」姿勢に着目している。そして、嫌なこと、悪いことを、そうと言えるように、そして「みんなのためになることお すきになるように」との実践信念に、当時の

永井の「確信」を持った生活綴方実践の「導入初期のすがた」を見ている。⁽²⁾

（二）「がまんしたこと」の詩」

次に、「がまん。したこと」の「詩」という見出しのもとに、三個の詩と、その一部への永井のコメント（添え書き）が記されている。

1. うんこ でたい。

おおはし けいぞう

ぼくは、いさおくと おにごっこしていた。

うんこがつまった。

からたが こわくなった。

ぼくは、それでも

おもしろいようにして あそんでいた。

五ふんぐらいしたら

うんこが、でたくなっていた。

いさおくんは、いどのとこで

ひとりで いしならべて あそんでいた。

けいぞうさんは「うんこがつまった」のを我慢して、身体が固くなっていたが、いさおさんと二人で「おもしろいようにして」鬼ごっこをして遊んでいた。でも五分位したらうんこを出したくなって、便所に行った。戻ると、いさおさんは、井戸の所で、一人で石を並べて遊んでいたのだった。一人で、待っていてくれたのだった。

2. あつこ^(アンス) くだいたい。

あんどろ たつや

ひるになるころ

せみのあな みつけて いたとき

あな なくて がっかりしていた。

ぶらぶらしていた。

あつこ^(アンス)のきの下 あるいてた。

あつこ くだいたかった。

それでも くわねでいた。

あつこ あまり みていると、くたくなる

そだから、ひがしに あそびにいった。

かえってきてみたら

あつこ 一つ どころだらけになって おっていた。

くだくなるから、なげた。

昼頃、地面に蟬の穴を見つけようと彷徨している間に杏子の樹の下を歩いていて、杏子を食べたくなつたが、食べなかつた。見ていると食べたくなるので、他へ遊びに行ったが、帰ってきて見ると、一つの杏子が、泥だらけで落ちていた。また食べたくなるから、捨てた。杏子を食べないで、我慢している様子が、目に浮かぶ。

3 あめ。

やまち マサミ。

おかあさんが

「まちに、いって あめ かつてくるからな。」といって

うちお、でた。

わたくしが あそんだ。

そしたら、

おかあさんが ただいま と かえってきた。

「おかあさん あめ かつてきたか。」と いった。

「うーん かつてきた。」そして、てさげお あけた。

やすおさ けた。

「おれさ けんねのが。」と わたくしがいった。

いんだ。あとから けっから

おら やんたじゃ おらくで

そして、がまんした。

おれが べろでくちべろ なめったきや

うが、やしこ なんだなと おかあさん いった。

母は、買ってきた「あめ」を、「やすお」にあげた。私にはくれないのかと聞くと、あとでと言われ、嫌だ食べたいと言いながらも、我慢したのだった。

6. うめ

石橋 たか子

うめ くれたれば、すべかった。

めお、しぶりました。

7. あり ころすべと おもった。

いとう おさむ。

ありお、ころすがど おもったけ。

ぼくが ころさないで、がつこうさ はいった。

ありが、ちよろ ちよろと

すのなかさ はいっていった。

★たすけて やった。そして ありが すのなかえ はいって いったところ おみてたところが よい。その ところが よい。

——を ひいているところで、よくわかる。

永井は、殺さなかったことそのもの（に着目してその行為）を褒めているのではない。「たすけて やった」ことの意味、蟻が巣の中へ入っていたところを見ていたという、その行為そのもの、そして（見る）に至った、そこに宿るその「ところが よい」と、言葉をかけている。

また、こういった作品もある。

10. ちよきん。

やまぐち みつお

ぼくたちの うちで、

日曜日 ちよきん するのです。

ちよきん するべ と おもって

「かあさん、ちよきんするから、おかねお、10円 ちょうだい。」と

ゆった。

かあさんが、あとから、やる といった。

みんなが ちよきんして かえってきた。

かあさんが、

おいしいのところに、かおかくして、

からだ くにと まげていた。

ぼくわ、まどのすきまに かくれて

10円 ちょうだい といった。
それでも、
もらわないで がまんした。

これは戦後に行われた「こども郵便局」⁽²³⁾、あるいは「子ども銀行」⁽²⁴⁾（学校貯金、学童貯金）のことであろうか。学校での「ちよきん」一〇円。皆は「ちよきん」して帰ったが、お金を呉れなかった母は、押し入れに顔を隠した。
これに永井はこう書き添え、励ましている。

★ここよんでいると、おかあさんのところが わかる。どこだか、よくよんで みなさい。
みつおくんわ、ちゃんと、きき、ちゃんと、目で わかつて、がまんしている。
ちよきんする日です。けれども、がまんした。
おかあさんも、よろこんでくれたでしょう。
みつおくんわ、ちよきんしなくても、
よいことが わかった と おもう。ちよきん いじょう よいことだ。
ちよきんしなくとも、この ちよきんの 詩わ よい。

永井は、この詩を読んでいると「おかあさんのところが わかる」とし、それが「どこだか、よく よんで みなさい」と学級に語りかけている。みつおくんはちゃんと聞いて目で分かって我慢していると記し、事実を見据えて書いていること、我慢したことを褒めている。そして「おかあさんのところ」を考えると、貯金を「しなくてもよい」のだとわかったことを褒め、それは「ちよ

きん」以上に「よいことだ」と永井は記している。永井は、お母さんは、みつおくんが我慢したことを、喜んでくれただろう、とも読んでいる。⁽²⁵⁾

11. うめ。

いとう おさむ

ぼくが せみお とるとき
うめが あおく なつてた。
くだそだ。
くであ。

うめくうと、
せんせいも こまる
しんばいする。

★くでえ、こころのなかで さかんさかんでいるようだ。さかんさかんでいるところ お ぐんと、そのとおりかいたのよい。

おさむさんは、青い梅を、食えそうだ、食いてえ、とその心の「内言」を表現している。これを、永井は「こころのなかで さかんさかんでいるようだ」と言っている。その心の叫びを、ぐんとその通り書いたのが「よい」と、書き添えている。

平塚は、これらの詩作品、特に先の「あり ころすべと おもった。」に言及しながら、子どもたちの書きぶりについて、こう評していた。

がまんしたこと―小便でたいのがまんした。注射のときがまんした。水のみたいのがまんした。「うめ」のようなものもある。

また、「あり」のような作品もでている。

…(中略)…

いずれ「はたらく子ども」のこともたちは、ひとりひとりがそれぞれに自分のとらえたものをかいている。ひとまねする子はいない。「はたらく子ども」はひとりひとりが生きている。⁽³⁾

(三)「そのほかの 詩」

① めんようの なぎこえ。

おおはし けいぞう。

ぼくが ねていたら

うらの ほうから、めえめえつて きこえた。

おきて ねどこで きいていた。

めんようの なぎこえでした。

ゆうがた くわお かせだ めんようでした。

★ゆうがた くわおかせて かわいがった、めんよう お おもった
のがよい。

へいろいろと、せわおして、めんよう が、そだつて いくように。〽

自分が、自分で桑を食べさせた綿羊が、めえめえと鳴く鳴き声を聴いていたことを書いた詩である。永井は、夕方自分が桑のえさを食べさせて可愛がった羊を「おもった」こと、そのことが「よい」のだと、短く書き添えて、その心もちを励ましている。

⑤ ほたる。

いしかわ かずみ。

ほたるお とつていたら、

ほたるお げすいに はいりました。

ほたるが ぼん と、げすいに、はいりました。

ほたるが しんだみたいにな

あかるく はいって いました。

★ぼん と げすいに はいった。しんだみたいにな。うごかないで、じつと ひかっている うつくしいところお みたのがよい。

蛍を採ろうとしたら、下水に入った。「ぼん」と入った。死んだみたいにな、明るく、入っているのを見た。永井は、蛍が動かないでじつと光っている、その「うつくしいところ」を見たのが「よい」と言い添えている。

こうして、永井は、その子の、ものの見方を励ますことばを添えていた。その捉えた事実注目し、褒めて、励ましている。よさを見つけ、そのものの見方や行為の事実のなかにある「よさ」をとらえて、これで「よい」のだ、これが「よい」ことだ、と励ましていた。

⑦ あばけねだ。

いしばし えいじ。

きくちせんせい きたけ。

みんな、けんかやめて、

じぶんの つくえに すわりました。

きくちせんせいに、ぼくも おこられた。

そんでも

きくちせんせい しよくいんしつに いったけ。

また あばけた。
みんなだ。^(ミナ)

「もいかい さきのつづき やねだ。」といった。

★けんかお してたら、どうだったろう。

けんか やねだ とゆう みんなのこえ。

これ お、きいたのがよい。

「きくちせんせい」が職員室に行くと、また暴れた。もうさつきの続きはやらないのだ、と言ったのだった。永井は、その後も喧嘩を続けていたとしたら、どうだっただろうかと、と問う。そして、けんかをもうやらないのだ、という声、「みんなの声」を、聞くことができてよかったと、ことばをかけている。

8. ほたる。

火のようじんしてたけ。

ほたるが、一ぴき とんできた。

（ほくが）ぼん ととびあがった。

ほたるが ぴかぴかと おちた。

てでとった。

ぼくが 火のようじんして ぐるぐるまわっていった。

ぼくが、うちえかえってきた。

ほたるお すこし さわってきた。

作者名の記載はないが、これも先に続いて同じ「いしばし えいじ」さんの作品であろうか。夜、火の用心を呼びかけ歩いていったところに蛍が一匹飛んで来た。「ぼん」と飛び上がると、「ぴか

ぴか」と落ちた。手に取って、そのまま地域を方々回った。うちに帰ってから、少し触ってみた。

平塚は、これらのうち、「ほたる」「めんようの なきこえ」の二つの作品を引きながら、永井の詩指導について、こう読めると指摘していた。

どちらも、やさしさのある詩だともいう。

（ほたるお すこし さわってきた）

（ゆうがた くわお かせた めんようでした）

さいごの一行があって詩になっている。

当時ナガイ先生は「詩みたいなもの」という言い方をしていたものだった。教育では詩であるかなにかは第一の問題ではないからだ。だが、「はたらく子ども」の子どもたちは、はやくも詩をとらえはじめている。⁽⁸⁶⁾

永井にとって、子どもの詩作、その形式は「第一の問題」ではなかった。ここまで確かめてきたように、詩作では、「よい」ものの見方、捉え方を、暮らしを綴ることを通して高めていくことに、その「教育」上の主眼があったといえる。

ここまでの、詩指導における永井の指導言に注目すると、永井は、子どもの詩のほとんどに、「よい」と言い添えていたことがわかる。貯金をしていなくても、貯金をしなくて良いことがわかったこの詩は「よい」。蟻を助けてやり、巣の中へ入っていったところを見ていた「その ところがよい」。梅を食いてえ、と心のなかで叫んでいる、その心のなかの叫びを「ぐんと、そのとおりかいたのがよい」。夕方に桑を食わせて可愛がった綿羊を「おもったのがよい」。下水に入っていた蛍の「うつくしいところ」

を「わたのがよい」。喧嘩をもうしないのだと皆の声をきいたのが「よい」。こうして、その子のその子の「よい」暮らしぶりを受け止め、その心が「よい」と認め、その表現を褒め励ます（赤ペン）なのであった。

ここにも、戦前から生活綴方実践を重ねてきた、永井の詩指導実践の一つの特質と意義を見ることができる。これは、前年度の『きかんしゃ』での学級文集実践、詩指導に連なり、それに続くものであったといえる。⁽⁴⁾

(四)あとがき

『はたらく子ども2ごう』の最終頁の、四〇頁には、このように「あとがき」が記載されている。

あとがき。

ちいさい かみきり に かいてきたもの、つづりかたのノートや、りかのちようめんに、けんきゅうしたもの、うちで、かいたもの、じゅうじかに かいたもの
たくさん ありました。

そのなかから、このくらい のせました。

まだ まだ のせて、やりたかったのです。

おもしろかったことも、いやだったことも、

がまんしたことも、けんきゅうしたことも

ぐんぐん かきましよう。

わたいのあせを ふきふき、がんばりました。なつやすみに ならないうちに、みんなに わたししたいとおもって、がんばりました。せなかのくるしいのも、がま「ん」しなければ ならなかった。

みんな、なつの あつさに まけないで
げんき一ぱい。せい一ぱい、なつお
すこして いら「っ」しゃい。

一九五二ねん 七月 二十九日。

みずさわまち。ふくわら ぶんこう。

子どもたちは、いろいろな時に、いろいろなものに、暮らしを綴ってきたのだった。この「あとがき」からは、永井が子どもたちを愛する姿勢、子ども達を思う気持ち、はつきりと伺われる。

この後、同年度の末頃に永井は体調を崩し、翌年度に休職することになる。⁽⁵⁾ここに記している、「せなかのくるしい」状況は、その前兆であつたのかもしれない。

おわりに

ここまで、『はたらく子ども2ごう』の子どもの散文と詩、永井庄蔵の指導言を追いながら、永井の一九五二年度一学期の学級文集実践の一端を確かめてきた。そこには、永井の低学年実践、初期指導の具体的な姿を読み取ることができた。

散文指導のなかで、永井は、よく思い出して詳しく書く方法と、その意義を指導言で示唆し、書くことのよさがわかるように、ことばを投げかけていた。また、永井は、子どもの語りを文字にしながら、「心のなかで かたるようにかく」のだと、働きかけていた。文集後半の詩指導のなかでは、子どものものものとしたえかた、振る舞いや心持ちそのものをとらえて、そのよさに着目し、直截に「よい」と認め、褒め励ましていた。

そして、ここに祖述してきたように、平塚は、永井の学級文集の分析を通して、永井の散文指導、詩指導の着実な「初期の」姿を読み取っていた。そこには、「生活をみつめている」子ども、「心をはたらかせてかたっている」子どもへの、永井のまなざしを読み取られていた。そして、「自分の生活をしっかりとみつめていくこと」を一層励まし、書くことを通して、大切なことを互いに「わかつて」いく方途としての生活綴方・学級文集実践を、低学年児童に丁寧な言葉がけのもとに実行する、永井の学級実践の意義と価値が、指摘されていた。

最後に、平塚の解説の視点を借りながら、『はたらく子ども2 ごと』に内在する、永井の生活綴方実践（理念）の特質として、特以下以下の点を指摘しておきたい。例えば、永井は、詩指導「わたくしは いやだ」のなかで、「みんなのために ならないことおまつすぐ いやだ と いえて、だれもしないように、がんばってゆくと、だれも かれも、みんな、よくなります」と語りかけ、「わるいことお、いやだと いえるひとに な」ること、「みんなのためにも なることお すきになるように。 かんがえて やつて ゆく」ことを、生活綴方実践のなかで念願していた。ここには、言わば広義の「人間教育」の視点があるといえる。そして例えば、永井の指導言のなかには、喧嘩や叩きあい、「わるふざけ」等の、子ども世界の現実を、大切な教育の対象と捉える視座があった。詳しく書くことによつて「ほんとうのこと」がわかってくるし、はたかなくてよいことがわかってくる。永井の、書くことの指導、生活綴方は、「ほんとうのこと」をわかっていくこと、皆でわかりあっていることを進め、互いに暮らしを高めあい、生き方を考えあっている、言わば「生活指導」でもあったと言える。ここに、永井の学級実践のなかの、〈生活指導〉とし

ての生活綴方実践という側面を、見ることができよう。

次稿以降も、本稿に引き続き、『はたらく子ども』第三号以降を取り上げながら、版面指導とその作品、その後の散文指導や詩指導を中心とした、永井の生活綴方実践・学級文集実践の展開を、跡付けていきたい。

【謝辞】

* 本稿の作成にあたり、宍戸春雄氏には、永井庄蔵氏の教育実践等についての貴重なお話を伺い、また宍戸氏保管の『つながり』等の第一次資料を借用させていただき、重ねて暖かい励ましをいただいた。ここに記して謝意を表したい。

* 山形県国民教育研究所（山形県教育文化資料館）の戸田貞子氏には、度重なる資料探索の相談に応じたいただき、資料閲覧等の際にも多大な配慮をいただいた。記して謝意を表したい。

* 本稿は、JSPS 科研費22K02251の助成を受けたものである。

註

- (1) 拙稿「戦後における永井庄蔵の学級文集実践と生活綴方（一）——水沢・福原分校「きかんしゃ」三号の児童詩から——」（『岩手大学教育学部研究年報』第八二巻、二〇二三年三月）。なお、あわせて、拙稿『イサワ教育こんわ』の憲法科特設論について」（『岩手大学教育学部研究年報』第六九巻、二〇一〇年三月）、拙稿「永井庄蔵の「憲法科」創設提案について」（『岩手大学教育学部研究年報』第八二巻、二〇二三年三月）をあわせて参照されたい。
- (2) 例えば、ナガイ・ショージ「追悼文集編集委員会編『追憶と論考 北の教師ナガイ・ショージ』（胆江地区民間教育研究団体連絡協議会（発行）、二〇〇〇年）参照。
- (3) 平塚は、水沢に生まれ、戦後は水沢小や胆沢第一小などに勤務した。『ひ

- らつかこうぞう・童話集けん太は2年生」(胆江地区民教連編集、石田印刷・奥州出版、二〇一〇年発行)参照。なお、平塚行蔵『戦後・生活綴方』(一七)(岩手県)民教研と共に「日本作文の会編『作文と教育』No.五〇八、一九九一年)参照。
- (4) 本稿で対象とする、『はたらく子ども』第二号の内容について論及があるのは、平塚行蔵『生活綴方・ある学級文集(3)』―ナガイ・ショウゾー『はたらく子ども』―(胆江地区民教連機関誌『つながり』第四九号、一九九三年七月二七日発行)、平塚行蔵『生活綴方・ある学級文集(4)』―ナガイ・ショウゾー『はたらく子ども』―(同『つながり』第五〇号、一九九三年九月二〇日発行)の二つの論稿である。両論考では、『はたらく子ども』各号の内容を、詩や散文などの分類から、横断的に跡付けている関係から、その夫々で第二号の作品を取り上げているが、本稿では、巻号ごとに内容を追ってゆくため、この二つの論考から引用を行う。
- (5) 平塚行蔵『学級文集改題・戦後』はたらく子ども』第四号(岩手・ナガイ・ショウゾウ指導)「(日本作文の会監修・編集『戦前戦後日本の学級文集別巻学級文集の研究―生活綴方と教育実践―』大空社、一九九三年、所収)三三五頁。
- (6) 例えば、拙稿「第10章 土田茂範の生活綴方教育の歩み―戦後東北・山形の地域教育実践の一つの姿―」(臼井嘉一監修『戦後日本の教育実践―戦後教育史像の再構築をめざして―』三恵社、二〇一三年、所収)、拙稿「小学校低学年における生活指導と『憲法学習』―土田茂範『村の一年生』の再読から―」(岩手大学教育学部社会科教育科編『岩手大学文化論叢』第二〇輯、二〇二一年)を参照されたい。
- (7) 秋田大学北方教育研究協議会編『北方教育資料コーナー目録』第一集(秋田大学附属図書館、一九七九年)には、以下の記述がある(三三五頁)。「153 はたらく子ども 巻号:3―6、刊行年月:1952.5.3、サイズ:B5、指導・発行・編集者名:水沢町福原分校2年 永井ショウゾウ、寄贈(託者名:鈴木喜代春)。なお、例えば、鈴木喜代春『子どもとともに―私の教育実践史―』(教育新聞社、二〇〇九年)、参照。
<https://www.isawa-heiya.or.jp/pages/56/>
- (8) 前掲、『追憶と論考 北の教師ナガイ・ショウゾー』一八二頁。
- (9) ナガイ・ショウゾウ『作文教育全国協議会から歸って』(日本作文の会編『作文と教育』No.11、一九五二年九月)。同論考は、前掲『追憶と論考 北の教師ナガイ・ショウゾー』一六―一九頁に再掲されている。
- (10) 平塚行蔵『生活綴方・ある学級文集(4)』―ナガイ・ショウゾー『はたらく子ども』―(胆江地区民教連機関誌『つながり』第五〇号、一九九三年九月、所収)二二頁。
- (11) 平塚、前掲、『生活綴方・ある学級文集(4)』一三―一四頁。
- (12) 平塚、前掲、『生活綴方・ある学級文集(4)』一七―一八頁。
- (13) なお、平塚はその論考(同上)では、この「かずおくと わたくし」の引用はしておらず、解説も記していない。
- (14) 平塚、前掲、『生活綴方・ある学級文集(4)』一八―一九頁。
- (15) 平塚、前掲、『生活綴方・ある学級文集(4)』二〇―二二頁。
- (16) 平塚の論考では、この作品「ぎゅうにゅうのこと」の引用、解説はしていない。
- (17) 平塚、前掲、『生活綴方・ある学級文集(4)』二二頁。
- (18) 同右。
- (19) 平塚行蔵『生活綴方・ある学級文集(3)』―ナガイ・ショウゾー『はたらく子ども』―(胆江地区民教連機関誌『つながり』第四九号、一九九三年七月、所収)一八一―一九頁。
- (20) なお、岩手・衣川地域の小学校に勤めていた元小学校教師、三好京三の小説『体あたり先生』(勤文社、一九九四年。初出は日本農業新聞連載「蟻ン子みつばち物語」一九九二年二月―一九九三年一〇月)には、「カナイ・リョーゾー」の名で、文集『はたらく子ども』の幾つかの文章と、平塚の論

稿の文章が、次のように引用されている。『いやなことをいやだといえる人になること。わるいことを、わるいといえる人になること』をめざしている」（同書、三二二頁）。「ここに、確信をもった綴方導入初期のすがたをみることができます」。（同書、三三二頁）。

(22) 一つは、この「ちよきん」は、戦後の「子ども郵便局」の活動の一つとも考えられる。例えば、「子ども郵便局、来春廃止 公社『ためる教育、役割終えた』（朝日新聞、二〇〇六年一〇月一七日付・夕刊）にはこう記されている。「子供に貯蓄の大切さを知ってもらおうと、全国の郵便局が半世紀以上にわたって続けてきた『子ども郵便局』が来年3月末で廃止されることがわかった。郵便局職員の手ほどきを受けながら、小中学生自らが貯金の預け払いを管理する活動だ。」「子ども郵便局が始まったのは1948年。地域の郵便局から貯金原簿のつけ方や通帳の扱い方を教えてもらった児童や生徒が、自ら校内での預け払いや利子の配分を管理する仕組みだ。郵便局は子ども郵便局の児童・生徒代表から貯金を引き受ける。修学旅行費用を積み立てるケースが多く、利子は非課税扱いとなる。60年代前半には1万校以上が参加し、加入児童・生徒数は250万人を超えた。」

(23) 例えば、吉川卓治『子ども銀行』の社会史―学校と貯金の近現代―（世織書房、二〇一六年）参照。なお、上岡学「昭和20年代に始まる『子ども銀行』に関する研究―総合的な学習の時間ならびに特別活動との関連―」（武蔵野大学教職研究センター編『武蔵野教育学論集』第二号、二〇一七年）参照。

(24) ここには、永井自身の、「ちよきん」に対する、否定的な評価・見解が表明されているとも読める。推測が許されるとするならば、永井には、一つは、学校や子どもの主体的判断や自律・自治によらない参加の強制、他律的な動員、子どもの家庭の事情を考慮しない貯金の強制への抵抗感覚、嫌悪の念があったのかもしれない。

(25) 平塚、前掲、「生活綴方・ある学級文集（3）」一九頁。

(26) 平塚、前掲、「生活綴方・ある学級文集（3）」二〇頁。

(27) 前掲、拙稿「戦後における永井庄蔵の学級文集実践と生活綴方（一）」―水沢・福原分校『きかんしゃ』三号の児童詩から―を参照されたい。

(28) 前掲、『追憶と論考 北の教師ナガイ・シヨージ』一八二頁。

* 岩手大学教育学部